

自転車が出来上がった。鉄工所を営む富永が、父の注文に応じ突貫工事で作ったものだ。

「サドルは余所の奴を引っ剥がした。ペダルは新品に近いチェーンの具合がいまいち完璧に調節出来んのやが、親父からの注文の期限がなにせ急やったから。勘弁してや」

「期限びつたしというところだな。まあええか」
父が頷く。

「ちよつとだけ言うところがあるで、良太」

富永は銜え煙草で、目を細めたまま顎をしゃくつた。
「坂道などでブレーキがあんまり効かんかったら、どこでもええから畦道に乗り上げる。ブレーキは前輪用と後輪用の両方を使い、スピードが弛んだところで左に車体を倒すんや。そうすりゃ、たいした怪我などせえへん。チェーンが外れたら、道端で降りてこうやって入れ直せばええ」

サドルを下にし、車体を逆さまに立てた恰好で、富永は車輪をガギガギと回す。

「さすが富永鉄工所だ。抜け目はないな。どこから何台拾うてきた」

「出所は企業秘密や。三台をバラして組み立てたんやし、

ペンキも塗り立てやから、結構手間食ってるで」

富永は若い時分関西に出たので、今も殊更に関西弁とやらを使い、儲け話には地獄耳だというほどの天分を發揮する。

「けど、五千元は高うないか」

「ええかあ、新品やったら、相場は一万と二千元や。それがたったの五千元。それも一昨日注文を受けて、もう今日納品や。手間賃も含めると、めっちゃ安やで」

富永は、軽トラの運転席から持ってきた伝票を舐めながら、金を受け取ると日付を書き、父に渡した。

「考えようでは、新品よりずっと高級や。なにせ、元は三台分やからな」

富永は金を受け取ると、軽トラをいきなり吹かせ、砂煙を巻き上げ去って行った。

良太の手元に残った自転車は、魚売りの年寄りがよく使う形の大型のハンドルに、大型の荷台が組み込まれ、サドルは子供用の寸足らずで、ペダルだけが嫌に新しかった。そのペダルを一回転させると、気合いの抜けた音で、チェーンケースがクシューーンと鳴る。

父が試しにサドルに跨がった。

自転車はペダルを踏み込む度に、クシューーン、ガギガギと派手な音をたてながら進んだ。三十メートルも離れて眺

めると、父の背中に覆い被さるほどに荷台が大きい。それに、全体に青黒いペンキが塗りたくってあるため、まるで年老いたシャモが空気を蹴って走る様に似ていた。

「車体がちよつと重たいけど、贅沢は言えん。まあ、これで準備オーケーちゅう訳だな」

ほら、と父がハンドルを差し出したので、良太もサドルに跨がった。踏み込むペダルがやけに重く、ペンキの青臭さと、チェーンから立ちのぼるオイルの焦げ臭さが、痛く鼻をつく。

良太の通う島内唯一の県立高校へは、片道八キロほどの県道に私道をまじえた本道と呼ばれる、かなり路面の荒れた砂利道を曲がり上って行くことになる。詰め襟一式と帽子は、遠い親戚の又の親戚から使い古しをもらい、学校で購入した襟章と帽章を付け、袖を通してみた。袖の丈がいく分短かく、足元も短かめである。

母は、祖母の勝代婆さんの遺訓である「長男に学問をさせてはならない」に背いてしまったことを、さかんに気にしていた。それは、次にやって来るかもしれない「学問をさせると、家にいたためしがない」という方を心配しているからだ。

「一、高校に通うことになっても、農業の手伝いには、変わらず一層励むこと」

「二、仕事は島内に求め、菅原家先祖代々の供養を行うという任を忘れぬこと」

これが、良太が高校に入學するに当たって母から求められ、了解させられたことであった。家は葉煙草耕作で生計をたて、狭い田圃に米を作っている。特に、葉煙草耕作は殆ど一年を通しての労力を要する仕事なので、良太が高校に通う時間、働き手から抜けるのは大きな損失になる。

母は軽度の心臓弁膜症を患い、無理が重なると寝込んでしまうのが常で、普段から顔色は青黒く、ふいごを思わせる荒い息遣いをしていた。

父は二十代の若さの頃から、部落の公民館長に選ばれ、さらに葉煙草耕作組合支部長とか、PTAの役員とかの世話役の多くを受け持ち、殆ど毎日、夕刻には会合に出掛けなければならぬ日々だった。

良太の下には、二つ下の弟、五つ下の妹、九つ下の弟がいて、家計は逼迫している。だから、良太の高校進学は、受験願書を提出する間際の一か月前になって、ようやく決まったのだった。

坂本晋平も山口美代子も入学し、良太と同じ一組に割り振られていた。

入学時の説明では、成績順にクラス分けをし、一組だけは入試順位五十位までで構成され、以下二組以下はバラ

スを考慮し、組まれたという。もつとも、一組は学年が上がる毎に成績順に組み替えられるから、安心することがないようにと担任から釘を刺された。

「今年の新入生、とりわけこの一組に割り振られた者の幾人かは、近年にないハイレベルの者が入って来てくれた。学校側は大いに期待しているから、目標を大きく持って、存分に頑張ってくれ」

クラス全員から、ホウ、という溜息が洩れた。郡内に十校ある中学のうち、良太たちの沼田中学出身者は、六人が一組に入っている。

新入生を代表して入学挨拶をしたのは、坂本晋平だった。入試成績でトップだった者が挨拶をするとの決まりだそう。晋平はたちまち一組の顔になり、一年生の顔になった。「二番は、美代子らしいぞ。沼田中学の秀才コンビがやりやがったな」

クラスに、たちまちそんな噂が駆けめぐった。晋平も美代子も、バス通学組である。

自転車通学組は、沼田中学出身では七人いた。松本商店の末広、薬局の公一、簡易郵便局の利秋たちである。誰が言い出すともなく、松本商店前に七時半に集合し、八時十分までに高校に到着する、ということに決まった。

利秋だけが、兄から譲ってもらった中古自転車である。良太のは三台の部品を組み合わせた奴だから、どの部類に

か失敗をやらしたのか」

良太は、今となつては言い訳になつてしまふが、進学を入試直前に決めたため、うまく試験の波に乗れなかったのだ。会場の雰囲気は飲まれてしまい、何箇所もの小さなミスを犯してしまった。これで、一組に止まったのが不思議なくらいである。

自転車部隊は、後になり先になりしながら、八時十分までには中庭に到着し、十五分からの朝礼に走り込む。

各時限の休みになると、クラスの外に出て、相撲を取るのだった。

ちょうど一組を出たところが、廊下角の広場になっており、七組までの腕に自信のある者たちが、自分の存在を誇示しようと我がちに進み出、相手を投げ飛ばし、床板に叩き付けるのが、二日目からの恒例となった。

誰が一番強いのか。それは、これからの高校生活を送っていく上で最も肝要なことであり、叩き付けられた者が、「もういつちよう」と叫びながら飛び付き、背を向けた瞬間の勝者に反撃をするのも珍しくなかった。

七組の高田、二組の吉川、五組の大野というあたりが体格もでかく、中学時代には柔道や陸上の投擲などで鳴らしたといい、存在を示した。中でも、吉川は名の通った任侠一家の息子らしく、入学初日にして、十人ばかりの取り巻

入るのか分らない。後は、みな新品だった。

「けつたいな自転車やな」

「魚売りのおっさんの、そのものじゃねえか」

末広や公一が物珍し気に、良太の自転車を代わる代わる覗き込み、触った。

「ハンドルと荷台のデカさの割には、サドルはまるで玩具やな」

「チェーンがやたらうるせえな」

なだらかな坂道を一齐に漕ぎ上って行くのであるが、良太はいつも出遅れる。車体が重く、車輪の回転も鈍かった。しかし、いったんスピードに乗ると、ブレーキを掛けても簡単に止まってはくれない。カーブを曲がったところの正面にバスが現れたときなど、一メートル手前で左の側溝に飛び込み、かろうじて難を逃れた。

であるから、上りは良太が最後尾から漕ぎ、下りは先頭をブレーキなしで下るといふ隊形になり、自転車の七人は行動を共にした。

「一組は良太だけなんやな」

末広も普段から成績は上位に付けていたので、二組に配属されたことが口惜しいらしい。数学で大きな失敗をやらしたとのことだ。

「晋平と美代子とはかくとして、良太は何番じゃろう」

「以前は晋平より良太の方が上じやったのに、良太もなに

きを従えていた。

「二組が最強だ。やっぱ一組には、俺たちに敵う奴はいねえな。頭でっかちの、青瓢箪みてえな奴らばかりじゃねえか。一番の野郎なんぞ、特にな」

吉川が、晋平のか細い腕を捻り上げる。晋平は、ひとたまりもなく壁の人だかりの中に弾き飛ばされてしまった。

腕が逆さまに捻れていたため、倒れ方次第では折れたかもしれなかった。

「ほう、貴様も一組の片割れか」

人垣を分け、寸足らずの制服を着た良太が前に出たものだから、吉川がせせら笑った。特に背が高い訳でもなく、肉がついている訳でもない良太を見て、「そんなけちな恰好で、青瓢箪野郎の助太刀にでも来たのかい」とふんぞり返った。

「相撲を取りたい」

良太は頷き、少し上体を屈めると、立ち腰のままで身構えようとしてもしない吉川の腹に軽くタックルをした。弾みで、吉川の体は、背後に並んだ取り巻き連中の中にもんどりうって飛び込んだ。あわてて体制を立て直した吉川は、「ふざけたことをしやがって、この野郎」と叫ぶなり、拳を固め、勢いをつけエルボーを良太の頭上に落としてきた。

体を沈めてエルボーをかい潜った良太は、吉川の下半身を両手で捌い、そのままの勢いで横に抛った。吉川の体は、

バランスを失い、背中から派手に廊下に落ちた。
吉川はしばらく仰向けのままでいたが、「覚えてやがれ」と捨て台詞を吐き、仲間を抱えられながらようやく立ち上がった。

良太は、葉煙草の作業や、米俵担ぎや、西瓜の出荷などで重いものを抱えるのには慣れていたし、小学生の頃から大人たち相手に草相撲を取っていたから、相撲にはかなり自信がある。

ちようど始業のチャイムが鳴ったこともあって、次の出番の隙を窺っていた大野も高田も、その場は引き上げるしかなかった。

次の休み時間になるのを苛立ちながら待ちわびていたらしく、一組のドアの外から、いきり立った五組の大野が良太を呼んだ。

大野は柔道で中体連を制したとかで、体つきから十分それと知れる。良太が進み出ると、大野は目を光らせ、やにわに肩口を掴みにきた。良太は、その手を素早く払って下に潜ると、前ベルトを掴み取りにし、突き上げながら一気に走った。大野の体は一瞬浮いて、ドウと背中から廊下に落ちた。まともに組めば大野の体制になると見た良太の、立会の一撃だった。

廊下に屯する連中から、どよめきが上がった。それまで、

二度目には良太が相手の背中を廊下の壁に打ち付けるといふ、五分五分の勝敗だった。

廊下相撲はしばらくみんなの注目を集めたが、学校生活に慣れ、人に慣れてくると、次第にソフトボールや卓球やバレーボールに興味が移った。

しかし、良太の強さは最初に学年中に知れたるところとなり、学年で難癖を付けてくる者はいなくなつた。良太はソフトボールやバレーボールにも普通程度には利いているから、こちらも都合良かった。

ただ、上級生の中には露骨に挑発を仕掛けてくる者がいて、ヤクザグループの子分から、便所の裏に二、三回呼び出しを受けた。良太は一人で出掛けて行くのであるが、決まって制服を着崩した連中がいた。

「菅原、貴様遅えだろが」
煙草を銜えた二番手ぐらいの者が、まず怒声をあげる。他の者は、二番手の怒声に合わせて「ナマ、言うんじゃねえぞお」と凄む。須藤と名乗った大将格は、ニタリと片顎で笑う。

「どうした。口もきけねえのか菅原」
二番手が、威圧的に迫ってくる。
「声が掛かって、普通に階段を下りて来ただけです。だいたい、廊下は走らぬことと書いてありますから」

大野とまともに渡り合う者などいなかったのだ。

「隙を突きやがったな、この野郎。もう一度来やがれ」

大野は屯している連中を遠ざけると、血走った目を良太に向ける。良太は廊下に仕切り線をチョークで薄く引くと、二回、三回と四股を踏んだ。二回目の勝負になった。相撲は立会で決まる。大野は、百キロ近い体を前にせり出して構え、気合いを込め、立った。

次の瞬間、廊下にひっくり返つたのは大野である。良太が低くかち上げ、当たった瞬間に体を開き、出し投げを打つたのである。大野の出足が空回りし、自分で三メートルばかり飛んで、転がった。この瞬間の連続技は、相撲をやつた者にしか出来ない。ともかく、二番続けて良太が、柔道では敵なしの大野を負かしたのだった。

大野は呆然と良太を睨んでいたが、さすがは柔道で鍛えたというだけあって、「分かった」と素直に負けを認めた。沸きあがったのは一組の連中の方で、「何でや」と奇声を発する。他の組の者も、「普通の体格じゃねえか」と、良太の勝ちが信じられないという溜息を漏らす。

七組の高田は二人の取り口を見てから、おもむろに現れ、立会の勝負は歩が悪いと踏んだらしく、陸上の投擲をやっていたというだけあって、良太の利き腕とは反対の左腕を捕まえると、いきなり振り回してきた。高田は力には力を、スピードにはスピードをとという取り口で、一度目は高田が、

「へらず口叩くと、その面張り倒すぞ」

「そんなことなら止めた方がいいですよ。あなたの方が怪我します。自分は誰も怪我などさせたくはないですから」

「この野郎、ふざけたこと抜かしやがって」
と言ったときには、二番手が良太の鼻先に迫って来たので、すばやく体を捻り、いったんやり過す。二番手は、空振りになった手を振り回し、再び背後から勢いよく飛び掛かってくる。

「怪我したいですか」

良太はすばやく二番手の腕を掴み、間髪を入れずに思い切り捻り上げてやると、関節のきまつた相手は動きが止まってしまう。良太があと少しだけ力を込めると、二番手の手は折れてしまうのだ。

「クソ、離せ、離せ、この野郎」

「怪我したくないらしいですね」
ボンと二番手の腕を押し返してやると、反動で肩口から大仰に転がってしまう。あわてて三番手と四番手が走り寄って来るときには、良太は背を向け、教室に入り掛けている。そんなことの繰り返しだった。

ヤクザ連中は、一人では動けない気弱な者が多いのだった。力も強くなく、気も小さく、みんなの前で恰好を付けようとすると、空回りするのである。とはいえ、良太が一人、一度胸が据わっているという訳ではない。実際、五、

六人を前にすると、足が竦むのだ。胸も躍っている。それを気取られないように、出来るだけゆっくり構える。その又ポーとしたところが、逆に相手を威圧するらしい。

最高の十人を相手にしたときなど、足が震え、脂汗が脇の下を、背中を伝い落ちた。心臓も激しく打っているのだが、顔色には出さない。むしろ、顔面が白い能面の表情に近くなる。

相手には刃物を持っている奴もいる筈だったが、なぜか踏み込んで来なかった。良太の目が、須藤の目にピタリと当てられていたからだだったかもしれない。

「用事、ないようですね」

良太が去るときの言葉は、決まっていた。

自転車部隊の連中は、帰りには校門に集合した。たいてい、末広が一番先に待っていた。

「よお、お前、須藤会の連中をねじ伏せたちゅうな。しかし、吉川はまだとしても須藤はやバくはないか。奴ら、ここらにシマに取り仕切つてるといふぜ」

「俺だつて好きでやつてやしないさ。礼儀は尽くしてるよ。会えば、挨拶ぐらいするしな」

いくらもしないうちに、公一や利秋たち全員が揃った。

「いつ見ても、良太の自転車はブサイクやなあ」

「魚屋のオッサンでも、もう少しはカッコ付けるぜ」

校門を出ると下りになるので、良太の自転車が先になる。ブレーキが首尾良く効かないからだ。前輪ブレーキと後輪ブレーキを、両方操りながら狭い学校通りを縫って行く。

大通りに出ると、急勾配の上りになる。末広たちは、待つてましたとばかりに立ち漕ぎになる。良太の自転車は、すぐにペダルが重くなり、チェーンが乾いた軋り音になる。

末広の自転車が最初に上りを制覇すると、いったん途中で降りた公一も、またサドルにまたがり胸突き八丁を必死の形相で上る。良太ははるか下の方から、降りもしない替わりにてんでスピードの出ないのろさで、上って行く。

峠の頂上から、末広が「みんな狡こいてるんじやねえか」と大笑いしながら、囁かしたてる。末広は、首筋から汗を流している。公一も利秋も、帽子をとって汗を拭う。良太が辿り着くのは、その頃になる。「遅えなあ」と誰もが言う。

良太が辿り着く間もなく、末広と公一がペダルを漕いで下り始める。この下りは途中いくらかカーブがあるものの、殆どが一直線になっており、距離もコースでは一番長い。

三分の一ほど下ったあたりで、良太が抜け出す。なにしろ、漕ぎっ放しで下るのだし、動き出すと派手にスピードが付き、クシューン、ガギギと音をたてながら、いつの間にか公一を抜き末広を抜いた。

「遅えなあ、どいつも」今度は良太が言う番だ。坂を下り、

カーブを曲がるとみんなは、バス停横の小さな雑貨屋前で自転車を止める。パンやアイスクャンデーを食うためだ。

末広が良太を誘う。良太が金を持っていないのを知っており、良太の分はいつも末広を持つ。良太は末広にだけは甘えることにしている。末広が「その代わり、ボディガードを頼んどのやから」と言ってくれるし、松本商店の息子であるから裕福なのだ。

七人が一度に入ると満員になる席を詰め合い、田圃の見晴らせる裏の部屋で、時間を掛けてパンを食う。同じパンを食うというのが、七人組の掟である。

ちようど同じ時刻に、晋平や美代子の乗ったバスが停車し、客を降ろして出て行く。「チェッ、バスの連中、ガリ勉野郎ばかりじゃねえか」と七人組が口々に言う。

あと十分もすれば松本商店前に帰り着くというところで、良太は脇道に逸れる。みんなは最初怪訝そうな顔をしていてたが、訳を知ってからは黙って見送るようになった。

良太は道端から五、六メートル入った畑の畦に自転車を止め、小高い丘の中腹目指して上る。いつもの場所に来ると腰を下ろす。そこはバスの往来する県道が見下ろせ、県道から隠れた場所になっている。

カバンから弁当を出すと、アルミの容器を開ける。麦飯がぎっしり入っている。おかずはたいい入っていないが、

今は筍の煮染め一品である。煮染めの汁がアルミの外側にまで雫れ、風呂敷に醤油の匂いが染み込んでいる。

良太は大急ぎで弁当を食う。昼休みには水を飲んで済ませているので、バス停前でパンを食うまで何も口にしていない。

中学のときまでは、学校が家から近かったこともあり、昼飯には家に帰っていた。ところが高校に入ると、昼休みに一斉に弁当を開く。男の数は、二次限目の終わりに早飯をし、昼休みには売店からパンと牛乳を買って来る者もいた。

とにかく、一斉に弁当を開く儀式に良太は入れなかった。アルミの容器に、麦飯だけを詰めた弁当が開けなかった。一人黙って教室を出て水飲み場で水を飲み、腹を減らさないために図書館に入った。

空腹であるので、読書にはあつらえ向きだったかもしれない。中学までは、家で本を読むことなど許されなかった。であったから、書架にある本の全てが新鮮だった。とはいえ、どの本をどう読めばいいのかさえ、最初は糸口がつかめなかった。

通っていた沼田中学校には図書室はなく、倉庫の隅に埃を被った廃棄済棚があり、そこに古びた一冊の文学全集があるのを偶然に見付け、教科書でわずかに知ることが出来る石川啄木、正岡子規、島崎藤村、北村透谷らの作品の一

部を、初めて読んだのだった。

であるから、自然と足が向いたのは明治、大正の作家たちの書架だった。萩原朔太郎を知り、宮沢賢治を知り、若山牧水を知り、夏目漱石や芥川龍之介ら、教科書に出てくる作家たちの本に夢中になった。高校はやはり凄い、と思つた。中学では目にする事のなかつた哲学書や、宗教書や、自然科学の本などにも興味を持った。

時間が足りなかつた。これまでの下地がないところに詰め込もうとするものだから、焦りが先に立つた。しかし、目の前の本を一冊、二冊と読み込むうちに、自然と浴け出してくるものを感じ、徐々に啄木や朔太郎の世界に入り込んでいった。

図書館にいても、須藤や吉川グループからの呼び出しが掛かつた。呼ばれば行くと決めていたから、トイレの裏や、体育館の裏に何度となく出向いた。

「遅えぞ菅原、ふざけるんじゃないやねえ。一発やつたるぜ」

「学校の中では野蛮なことはするなと書いてあります。ふざけてなどいいないです。なんなら、担任か学年主任に聞いてみてほしいもんです」

というあたりで、背中を見せゆつくりと歩いて戻る。どういう訳か、彼らはそれ以上追つては来なかつた。手を出さない相手には絡まない、という仁義の掟が生きていたのかも知れない。

耕耘機使いも、田植えも、草取りも、葉煙草の収穫も、牛の世話も親より手早いし、先に立つて働く才覚がある。

そのトツシャンと、四つ、五つの頃からいつも比べられてきた。だから、父も母も、学年の五位という良太の成績を見て、良いなどとは口が裂けても言わない。

雨の日の自転車行は、スリルに満ちている。七時半に集合し、八時十分までには学校に到着しなければならぬのだから、ビニールの合羽を羽織つた恰好で、見通しの悪い中をとばして行く。荒れた砂利の路面であり、激しい雨が降つた朝には、道が深く抉れていたりする。

良太の自転車は、十メートルほど飛んで、田植えの済んだばかりの水田に転げ込んだことがある。三十度の坂道をブレーキなしに漕ぎ下り、カーブを左に切つたところの道が鋭角に抉れていた。そこにタイヤの前輪が突つ込んだのだから、たまらない。

反動で一回転し、体の方が先に飛び、道に沿つた十メートル先の田圃で水飛沫を上げた。その上を振れた恰好で自転車は宙を舞い、落ちてきた。そんな奇妙な間があつた。

「大丈夫かよ、良太」

末広たちが引き返してくる。良太は泥水の中で立ち上がり、カスリ傷一つ負わなかつたことに、自分の方が驚いている。

一年次の終わりの総合成績は、学年の五位に付けた。吾平には敵わなかつたが、美代子を抜いていた。といってもこれは定期試験だけの結果だから、中間、期末試験の時期に少し頑張ればついてくる結果だった。

良太の場合、毎日の積み重ねには絶対的な時間の不足があるから、これが即実力とはとても言えないものだった。

家に帰れば、仕事が待っている。農家の仕事は、日が暮れても終わらない。収穫した葉煙草の乾燥場への吊り込みは、日が変わる時間になつても切りが付くまで続けられる。

明日試験があるから、という言い訳は通じない。家で教科書を開いたり、図書を開いたりする時間は殆どない。商店の乾物を包んだ新聞紙を読んでさえ、怒鳴られる。

「そんなことやつてる場合じゃないだろ。仕事が先。何怠けてるんだ。ほうら、雨になつちまう。立つたままで麦の芽が出るぞ」などと、母から容赦ない言葉が飛んで来る。

「ただでさえ、日中の大部分を金まで払って遊ばせてるちゆうに。中学を出て後を継いだトツシャンとは大違いだ。勉強は学校ですれば済む。約束だろ。家では仕事だ。農家の常識じゃないか。麦の穫り入れを遅らせるなんぞ、世間のもの笑になつちまう」

言われることはいつも決まつている。トツシャンは、親孝行のお手本だよと、いつも誉めそやされる隣家の子だ。

「ハンドルが重たくて、袂れを交わせんかつたんやろう。しかし、うまく飛んだもんじゃ」

公一と利秋が、手を叩いて笑い転げる。「笑つとる場合か。一つ間違えば、首の骨なぞ折れとつたかもしれん」

末広がが公一たちを制しながら、それでも田圃から這い上がつてきた良太の恰好に笑い出した。良太は全身に泥水を被り、顔も制服も濡れ通っている。

みんなで大笑いしながら、田に沈んだ自転車を引っ張り上げ、ちゃんと走行に耐えるのを確かめ、また一斉に八時十分に向け、ペダルを漕ぎ出す。

良太も、カバンを袈裟懸けに構え直し、水を吸つてやら重くなったペダルを懸命に漕ぐ。濡れた合羽と制服は肌に張り付き邪魔になるので、前の籠に丸めて放り込み、大きく離された連中の背中を追い掛けて行く。靴底には、泥のぬめりが残っている。

学校に到着し、保健室に直行したのだったが、若い養護の教諭の方が吃驚して、「無茶過ぎるわよ。よくも大怪我しなかつたものねえ」と言いながら、着ているものを全部剥ぎ取り、汚れを洗い落とし、肘と脛に負つた軽い擦過傷を丹念に消毒してくれた。

「この恰好じゃ、教室に入れないでしょう」

と、代わりの下着とジャージで一日過ごすことになり、

放課後保健室に寄ると、下着も制服も洗われ、乾いていた。

良太が保健室から代替えのジャージなどを貸し与えられたことで、尾鰭おびの付いた噂が校内に広まった。

「年寄りが田圃に落ち動けなくなっているところに通り掛かり、助け上げてやったらしい」

「須藤会のチンピラ連中に因縁を付けられ、雨の中で決闘になった。七人を相手に素手で立ち向かい、二人を病院送りにしたらしい」

「保健室の由美先生から丸裸にされ、尻の穴まで拭かれたらしいんぞ」

などと、あちこちで話が作られ、それまで良太のことを知らなかった者までが覚えることになった。なにしろ、一日中、保健室から借りたグリーンのジャージで過ごしたのだから、嫌が上にも目に付いてしまった。

「奴の自転車、変わつとるな。わざわざ何台かを潰して、一台に作り直したらしい」

「何で、妙ちきりんなもんこしらえたんじや。新車一台の方より、わざわざ細工した分だけ気合いが入つとるわい」

「改造自転車うのか。大学では、自転車サークルの連中が、すごい奴を造るといふぜ」

部品を組み合わせてこしらえたポロ自転車までが、好奇の目にさらされた。坂道の荒れた路面から水を張った田圃

に落下したというのに、骨格部分が一本も曲がったり、折れたりしていなかったからである。

二年生になった良太のことは、校内の殆どに知れわたった。相撲で高田や吉川や大野を負かしたということが、大きかった。便所裏や体育館への呼び出しも減っていった。学年の五位に付けているということも有利だった。良太は、十分一目置かれる存在になっていた。

その分だけ良太は図書館にいる時間が増えたとし、目付のよくない連中たちと顔を合わせることが少なくなった。

良太は啄木に傾倒した。啄木の歌の一首一首が、自分の内に響こっているものに響いた。

啄木の切実な気持を詠んだ歌が、心を射たのだった。「やはらかに柳あをめる」の歌など、憂いに満ちた自分が今、北上川の岸辺に佇たんでいるという錯覚に陥った。

真似をして、良太は歌を詠み、詩を書き始めていた。授業時間も、気持は窓の外の雲の行方の方に飛んでおり、遠方の鳥影を縫ぬって港に入ってくる客船の方に飛んでいたりした。

文芸部がないことを知ると、文芸同好会を立ち上げたいと思つた。立ち上げるには十人の同好者が必要だったが、図書館にいつもいる女生徒に声を掛けると、三日目に十五人の賛同が得られ、良太が代表となり学校に申し出ること

になった。顧問には、図書館主任の国語の教諭に就任を願ひ、二年時のスタートからほどなくして同好会が成った。

「何や、今度は妙なもん作りよつたな」

末広が真つ先に聞き付けて、「美人ばかり集めたというじゃねえか」と良太の耳の傍で言った。なにしろ、女というだけでざわめきたつ連中だから、お洒落なんかには最も縁のなさそうな良太が、そんな会を作つたということでは驚いたらしい。

「どこからこんなこと考え出した。誰が見ても、女たらしのしそうなことだ。保健室での丸裸が、病み付きになつたんじやねえのか」

「図書館に通っていたら、啄木とか朔太郎とかを知つて、自分でも作品が作れるんじゃないかと思うたという訳だ。作品を作つたら、発表の場が必要になる。じゃ、どうするかだ。いつも窓口にいる図書委員の一人に声を掛けた。それだけのことさ」

「さすが良太だと言いたいけど、そんな離れ技があるとは思ひもせんかった」

「自己表現というものがあつて、男にも女にも差がないということを知つた。これは芸術ちゆうてな、女々しいことなんぞではないんぞ」

「芸術てか。しかし、田舎じゃとても流行らんぞ」

末広は、変わらずパンも奢ちかつてくれたし、自転車部隊の

列の形も変わらなかった。

同好会の誌作りは、女子の力がおおいに役立つことになった。もともと、女子の方が話すことにも、書くことにも長けているから、誌を作ると決まったら、彼女たちのアイデアが次々と出された。誌名はどうするか。表紙はどうするか。どういう内容にするか。誰が編集責任者になるか。掲載作品の選別は誰がどうやって行うか。創刊号には顧問からの寄稿も必要だ。あとがきは誰が書くか。印刷はどこに頼むか。など結構多くの決めごとをしなければならぬことに気付かされた。

良太は行き掛かり上、会の司会、進行役を選ばれ、顧問への寄稿依頼の役目も引き受けさせられた。誌作りが、女子たちの多くを注目させ、彼女らに熱気を与えることになるうとは、最初想像だにしないことだった。

同好会の代表には良太が、副代表には図書委員の長田直子、川岸今日子という二年生が選ばれた。編集委員は、後二人を加えた五人で担当することになり、一年生の井出真由子と堤香奈が互選で決まった。

原稿締め切り日は約二か月後とし、七月一日には創刊号を出すということにした。

原稿の集まりも早かった。原稿受付担当で図書委員の長田の元に、二週間も経たないうちに一号分はゆうに越える

分量が集まったという。良太も見せてもらったが、詩、エッセイが大部分で、内容も悪くないのである。締切日を一月以上残し、「この調子でもっと集まったら、どうしよう」と、長田は悲鳴をあげている。

良太も予想外のこと、途中経過を報告し、編集委員会で意見を出してもらった方がいいかもしれん」と考え、放課後に委員会を開くことにした。委員会の連絡は、図書室に掲示すればよかった。

委員会では活発な意見が出された。創刊号に続いて、第二号を早々に出すこと。委員会の責任で、優れた作品を選び出すこと。詩、エッセイの外に、小説や評論も掲載したいこと。限られた予算の範囲で発行するのだから、一人当たりの標準的な提出枚数を決めること、などであった。

二年生に伍して、一年生の井出と堤が活発な意見を出した。井出はこれまで作文コンクールや感想文コンクールで度々入選し、地域の新聞に何度も掲載されていた。見た目はかなり大人びており、目鼻立ちに鋭敏なものを漂わせている。堤もかつて、地域の中学生五百人が応募したエッセイコンクールで、最優秀賞を得たという。

長田と川岸も、図書委員を志願するというだけあって、幼い頃からかなりの本を読み込んでいるらしい。代表の良太だけが、読んできた本も少なく、詩もエッセイも、まともに書いたことがなかった。

菅原のクソ野郎、今度という今度ばかりはえろろ恥かかせやがったな」

男が、良太の襟首を力まかせに掴み、須藤の前に突き出した。

「井出真由子はな、須藤会の女だ。つまり、俺の女だ。お前、真由子に手え出したんだっていうじゃねえか」

「何のことです」

「泣きながら走り込んで来た。お前、真由子に何をやらかした。部屋に一人でいるところを狙い、後ろから羽交い締めにして、無理矢理に、とな。ド百姓の分際ですよ」

「ある訳ないでしょう。ド百姓の分際には」

「ふざけやがるんじやねえ。俺の面に泥を塗り、大事な女をキズものにしてくれた。この始末は、ただで見逃す訳にはいかんのだ」

須藤は、舌舐めずりをしながら口上を言うと、ポケットから光るものを取り出した。飛び出しナイフだった。

良太の胸が激しく鳴った。後ろからは、七、八人が間を詰めながら囲んで来る。

「こいつを、どてっ腹にぶち込んでやる。それとも、その薄汚ねえチンポを切り落とし、二度と使いもんにならねえようにするか」

良太は動かなかった。いや、動けなかった。見る間に、須藤が間合いを詰めて来る。細く攀り上がった目には、炎

顧問からのアドバイスもあり、創刊号であるので、それが最もよしとする作品に限り掲載するものとし、なるべく早く次号にとりかかるという方向で決着した。

「最近、女の子とえらい仲良くやつとるなあ」

「結構、噂が飛んでるぜ」

末広と公一が、良太を見ると脇腹を小突く。「何ちゆうこともない。俺なんか、ほんの形だけの臨時代表やし」

「そこだよ。見栄えも、恰好もたいしたことがなく、口下手なお前がよ、何で美人の井出や堤と付き合えるんや、ということじゃな」

「答えるとするなら、ハートの問題だぞな」

「オウリや、ハートやとう」

三人は腹を抱えて、笑い転げた。

三人が笑い転げていると、いつの間にか背後を男たちに囲まれていた。七、八人はいる。須藤の子分たちだとすぐに分かった。

「貴様らその高笑いは何だ。クソ野郎めらが」

一の子分と称している三年の男が、肩を揺すりながら近づいた。

良太を指さし、ついて来いと言う。良太は末広と公一を自転車置き場に残し、男たちに囲まれて歩いた。行先は、いつもの体育館の裏のあたりらしい。

が燃えている。

良太は瞬間体を捻ると、間髪を入れず須藤の手首に向かつて突進し、激しく拳を突き出した。鋭い痛みが手指に走った。良太の右拳から血が噴き出した。叩き落としたナイフの方は追わず、須藤の右腕を渾身の力で逆さに捻り上げた。良太の拳から噴き出す血が、須藤の顔を黒く染めた。しかし、苦悶の表情をあげて呻くのは須藤の方だった。

須藤の右腕はとうに折れている筈だった。救急車がやって来た。良太と須藤が近くの外科に運ばれた。末広も公一もすぐにやって来た。利秋たち自転車組が全員揃った。

良太の拳は、小指と薬指と中指から出血しており、十数針縫い、テープで四重五重に巻かれ、三時間後に放免された。もつとも、教頭と風紀担当教諭から三十分も説教された挙げ句の放免であったが。

須藤の方は、右手尺骨複雑骨折とやらで、そのまま入院となった。

「無茶するな。奴がお前の体当たりに怯まなかつたら、お前の命の方がヤバかつたろうぜ」

自転車部隊の連中が、口々に言う。

「ところでさ、ホンマのところ聞か、真由子をやらかしたって本当か」

「ふざけんじやねえ。お前らまでが何ぬかす。言い掛かり

だと分かつとるやろう」

良太は、包帯をした手でハンドルを操りながら、一際強く気合いを入れ直した。

創刊号が完成した。予想以上に分厚い、立派なものが出上がった。小説は川岸が、エッセイは長田が書いた。堤は長い詩を、井出は前衛的な詩を書いた。良太は、葉煙草の作業に当たると自分の気持ちに忠実に、短歌を二十首詠んだ。啄木の影響が濃く出ていた。

顧問は、思いがけず中身のある誌に仕上がったことを、「このレベルを二、三段階上げると、大人の同人誌にも遜色をとらないものになるかもしれん」と言い、自らが加わっている同人誌の最新号を、川岸や井手らに渡した。

地域の新聞社が創刊号を大きく取り上げ、「君の目」というタイトルの、可愛がっていた牛と別れる一日のことを書いた川岸が写真入りで紹介され、井出の詩が転載された。井出の詩は、H氏賞とかをもらったことがある顧問を唸らせ、新鮮でナイーブな表現は詩人としての資質あり、と早くから言わしめたものである。

ただ、性に対する希求みたいな箇所は「ちよつと工夫の余地があるのではないか」とのコメントが付され、新たなことを敬遠する地域の気風に押し戻されるかたちになったが、難点と言えばそのくらいだった。

創刊号が出、話題を集めたことで、入会希望者が多く現れ、男子も含め二十数人が新たに申し込んできた。

良太の自転車は、二年目の夏になると、ペンキの色が剥げ、チェーンカバーは外れ落ち、サドルもガタつき始めた。何度かブレーキが効かなくなり、富永鉄工所にその度に持ち込んだのだが、「もうこの部品、どこにもありやへんのや」という一言で片付けられてきた。一応応急処置だけはしてもらったものの、三日も経つと元の状態に戻るのだから「乗り方がえろろ乱暴だし、これなら一からやり替えた方がええのんと違うか」

富永は、銜え煙草の煙に目を細めながら、自転車をひっくり返して方向を替えたりして見た挙げ句、「五千円分はちゃんど釣りがくるほど使うとるで」と、もはや処置なしという大仰なゼスチャーを見せる。

良太はブレーキのことでは何度も危うい目に遭ったが、何故か骨格とタイヤだけは頑丈なので、一日延ばしにしてきたのである。

二年の秋に、末広がが自転車部隊を去った。自転車を辞め、五十CCのバイクに替えたのだった。その末広がが、良太の自転車を見て、「俺のでよけりやあ、使つていいぞ」と言ってくれたので、組立自転車が完全に潰れたときには、そ

の言葉に甘えることにしている。

だから、七時半に松本商店前を発つのは六人になり、やがて利秋がバス通学に変更したため、五人になってしまった。五人は寒風の舞う本道をけ立てて、八時十分を目標に坂道を芋虫よろしく漕ぎ上り、下りには風の底に潜り込む勢いで学校を目指した。

文芸同好会の第二号も、創刊号に劣らない原稿の出具合で、川岸は中編にいどみ、井出は「笑う女」と題する大胆とも言える詩を発表した。その詩は、再び地域の新聞に転載され、文芸同好会誌の存在を多くに知らしめるところとなり、特に井出は、新聞社の求めに応じ、定期的に詩やエッセイを掲載してもらおうという位置を得た。

良太の短歌は、顧問に言わせれば、明治、大正の作風であり、もう少し自分の言葉で詠み込む必要があるというところであったが。

学校では須藤とのことで話題を提供し、相撲での攻撃の鋭さを印象付け、文芸同好会を起こし、成績もまずまずのところにつけているという良太であるが、組立自転車を通うことは変わらなかった。昼飯代わりに水を飲み、帰り際に小高い丘の中腹で、一人麦飯弁当を食うという毎日でも変わらなかった。

末広ががバイク通学に替えたため、雑貨屋でパンを食う楽

しみはなくなった。

自転車部隊の結束も、一年の当初に比べるとだんだん緩み、特に下校時の集団行動はとり難くなった。それぞれが進学、就職と進路が異なってきたため、進学組では補習が行われ、就職組でも公務員模試や簿記や、算盤の特別授業が組まれたりしたからである。

良太は進学組のトップ集団にあり、旧帝大志望の十数人が寄れば決まって話す話題に、無関心だった訳ではない。何度か親に相談してはみたが、まるで問題外だという返事が返ってきた。もつとも、入学時の母との約束もあり、その母の体調が思わしくないの、大学受験のことは努めて考えないことにした。

母方の伯父が役場の総務部長をしながら五反の田を耕しており、是非に役場を受験しろと言ってくれてもいた。大學生生活への希望をなくした訳ではないが、他の方法はないだろうかと通信教育の案内を調べ、時間を掛けながらではあるが、教員や司法書士などの資格にチャレンジしてみるのがいいなと思った。

新しい書架を巡っているうちに、有機農法や無農薬農法という本を見付け、惹かれるままに読み、繰り返し読み進むうちに、農業にも未開発の分野が多く残され、これらを工夫し追求している現場の人々に興味を覚えた。自分に与えられた方向は、このクリエイティブな探検を行う道に入

ることであるのかも知れない、と思ったりもした。

高校では全校行事として、体育祭や文化祭のほか、冬季の伝統のイベントとして、郡内一周駅伝が年頭に行われ、二月にはラグビーのクラス別対抗戦が、さらに十月にはこれもクラス別対抗の陸上・球技大会が行われる。

良太は、陸上・球技大会では、腕力を買われ二年続けて砲丸投げにノミネートされた。といっても、腕力だけでは大野や吉川や高田に及ばず、一年次の結果はさんざんだった。相撲に要領があるのと同様、砲丸投げにも、構え方や全身のバネを使って投げねばならないという、違った要領があった。

大会はぶつつけ本番で行われることはなく、二週間近い練習期間が設けられる。

一組から選ばれたのは、長島と新藤の二人で、三人の合計で順位を競うのだった。長島はラグビーのフォワード、新藤はバスケットをやっていた。

長島は幼い頃から漁師の手伝いで鍛えたといい、黒い肌には厚い胸をもっている。力も当然強く、足も速い。米屋の新藤は、十種競技があれば挑戦したかったと言うだけあって、普段から米俵を担ぐことで筋力を鍛え上げていた。良太は特に腕力が強いというほどではなかったが、田畑の傾斜を上り下りし、葉煙草の生葉を山盛りの籠で担ぐ等して

いるうちに、自然に筋肉を作っていた。

「良太、女々しい歌ばかり作つとるのに、砲丸なんぞを抱えられるのか」

長島がからかい半分に近い、入念に股割をした。新藤は自転車のゴムチューブを使った独特の準備運動を丹念にこなし、良太は十回、十五回と四股を踏む。

それほど広くはないグラウンドでは、全校二十一のクラスで同じ練習が行われている。放課後にグラウンドに集まるのだから、十分な時間はない。秋の夕暮れはいつにも増して早い。

長島、新藤、良太の順で一回目の投擲を終え、二回目に入った。一回目は、米俵で鍛えたというだけの貫禄を見せ、新藤が二人より一メートルほど遠くに投げた。長島が投げるときは新藤が着地予定地点で待ち、新藤が投げるときは良太が、という輪番で役割を決めて行うのであるが、前後左右で別のチームが練習をしているのだから、いつも三百六十度の範囲に気を配っていなければならない。

グラウンドの外に、末広と公一の姿があって、「水腹だろ、お前。腰がフラフラしとるぞ」と野次を飛ばしているのは知っていた。末広はバイクに跨り、公一は自転車のハンドルに手を掛けている。練習を覗きに来たのだ。

新藤が投げる番になり、良太は着地点から斜めに歩き、十分安全を見越して投擲を待った。新藤は砲丸を抱え、放

り投げる寸前に何を思ったか、動作を急に中止した。

新藤は「悪い、悪い」と舌を出し、前に転がった砲丸を斜め方向に歩き、拾いに行った。下校を告げるチャイムが鳴り始めた。新藤が砲丸を拾い、顔を上げた。良太も少し屈んだ恰好に目を落とし、新藤の照れた顔を見た。

「ウオーツ」と誰かが低く叫んだとき、良太の眼前に迫ってくる砲丸があった。

良太の記憶は、そこで途切れてはいない。「大丈夫、大丈夫だ」と口を動かし続けている自分を、はっきりと覚えている。

「誰が投げたんだ。投げそこなったのか」

学校に居残っていた全員が倒れた良太の周りに集まり、長島と進藤が、「大丈夫か」、「脈はあるか」、「マジでやばいぞ」と叫んでいた。

末広も公一も、大野も吉川も高田も、傍にいた。投げたのは、隣で練習をしていた大柄な一年生で、「手が滑ってしまったって」と青ざめ、泣きながら震えていた。

校長も、教頭も、担任も、養護の由美教諭も取り乱していた。駆け付けたらしい文芸同好会顧問も、長田も川岸も井出も堤もいて、女性たちは互いに抱き合っていた。

やがて校庭の真ん中に、夕焼けを揺らしながらヘリコプターが降り、すぐに県の大学病院に飛んだ。

良太の傷は、前頭骨が陥没しているが、幸い頭蓋内には

損傷がなかったらしく、救急手術を受けたものの、外傷が完全に癒えれば、退院可と告げられた。

良太には、頭上に迫ってきた砲丸を目に焼き付け、多分人事不省の状態であったであろう時間のことまでが、明瞭に記憶に残っており、主治医に説明したのだった。主治医も、たまにそんな例があるんだよなと言った。

「怪我の状態が状態だったんで、回りが吃驚しただろうけど、結果を言うならば打ち身の類だ。余程上手い受身をとったのだろう。しかし、鉄球が迫って来る間際に、受身も何もないもんだ。奇跡的な出来事だと、医者の身にしてもそう思うよ。君の持つて生まれた運だとしても言うのだろうか。つまり、君は格別に運がいいのかもしれない」

大学病院では重篤な患者を数多く診ているとみえ、良太の場合は、傷口の消毒と、レントゲンなどによる経過観察が、その後の主な治療であるらしかった。

父は、手術のときに一度来院したのだが、母は忙しいことと、自分の心臓弁膜症の具合が優れないからということと、とうとう顔を見せなかった。

田圃の収穫で、一番忙しい時期に入っている。人手が何人あっても足りないのだ。母は三人の子供たちの面倒も見なければならぬ。良太の見舞いに出ることは、どうやくりくりしても無理な話だ。良太も家の様子が十分分かるだけ

に、母の方が倒れやしないかと、反対に心配だった。

であるから、重篤ではないと告げられたまま、傷口が癒えるまでの間、ベッドで過ごすことに罪悪感すら感じながら、病室の窓から大学のキャンパスを眺めた。キャンパスに行き交う若者たちは学生であらうし、白衣の男女は医師や看護婦たちだと知った。病院の入口付近は、年配の患者で溢れ、透けた窓から受付付近に並ぶ長い列が見えた。救急車が頻繁に入って来た。時を選ばず急患が運び込まれて来る。良太自身も、つい先日同じ入口から搬入されたばかりだ。救急処置室の騒々しき、手術室の冷たい台が肌を粟立たせた感触もはっきり思い出すことが出来る。

「菅原君、菅原君分かるか」

良太の頬を軽く叩き、名を呼ぶ執刀医の声が聞こえ、良太ははっきり返事をした。

「麻酔がもう少しで醒めるからな」

良太は処置室に移され、夢の中を泳いでいる気分だったが、やがて目の前に計器が見え、それを覗き込んでいる看護婦の背中が見えた。

「ありがとうございます」

と発した言葉は、看護婦に伝わったらしかった。振り向いた看護婦の、マスクの奥の目が微笑んでいた。看護婦は、なお計器の加減を確かめ「大丈夫なの。良かったわね」と

まだ少女らしい声で言った。

頭に広いガーゼが当ててあり、歩くとさすがに鋭い痛みが走ることがあったが、それは切り開いた傷口の痛みだと説明を受けていた。

ベッドに背を持たせ、収穫で足の踏み場もないであろう家のことや、自転車部隊の連中や、文芸同好会の仲間のことを思った。学校へは担任に電話を入れ、一か月程度で済みそうだと伝えていたから、みんなには伝わっている筈だ。そうしていても、考えは自然に図書室で読んだ本の中身の方に飛んだ。大学は無理だとしても、それに代わる方法はきつとあるに違いないと考えた。自分の気持ち次第で、大きなことにもチャレンジ出来るのではないか。今は、それを整理したり、見付けたりするために与えられた時間なのだろう、と思いを巡らせてみることにした。

「そんな組立自転車、もう止めるよ。俺たち、何遍びつくりさせられたらいいんか」

松本商店の前で、公一が言った。

「いいや、良太には大怪我が似合うとる。何回、土壇場から這い上がって来たんじゃないか」

「尋常なことでは済まんよ、良太は。しばらくバスで通えと言われたじゃろうに」

二年の三学期に、自転車部隊が忘れられないということ

で、部隊に復帰した末広が言った。

「済まん。俺はこの自転車が好きだし、日頃から誰よりも鍛えとる筋金入りじゃ。分かったんや。だから、俺は俺の流儀でやる。見とれよ。俺は俺自身のやり方でやる。なんせとびきり運がいいんやから」

「何のことや」

「いや、企業秘密じゃ」

良太はドンとサドルを叩くと、飛び乗った。

「おほう、負けず嫌いの性分はちつとも変わらんや」

「また、別の方法で美人たちを集めるんか」

「アホ抜かせ、真剣に将来のことを考えよるちゆうによ」

末広に習い、利秋も自転車組に戻った。その利秋がついて来る。公一もついて来る。

良太は、砂煙を巻き上げ、ブレーキなしで刈田の中の坂道を全力で漕ぎ下った。

「末広、今日はパンを二つ奢れ」

「それでええんか。おうりや、まかせとけ」

大学病院から復帰した良太の一日目が、三学期の寒風の中で始まった。

(一)